

参拝者で賑わう茂原観音堂

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

宇都宮の最南端に位置する茂原町。この東の端に茂原観音堂がある。観音堂の東側は田川によって形成された肥沃な沖積地、観音堂の境内は、その台地と沖積地との境に広がる。

茂原観音は、正式には穴穂山普門寺と称し、真言宗の寺院であった。大正期に廃寺となり、観音堂のみが残り、現在は下野市にある真言宗智山派開運寺の管理となっている。現在の観音堂は江戸後期の建築といわれ、当初は茅葺屋根であったがその後銅板葺きに変えられた。本尊は聖観音菩薩で、縁起によると「承安四(二七四)



間引き図絵馬

年、この地に住んでいた宇都宮氏の家臣・茂原遠江守家次が枕辺に立つた聖観音の像を彫刻して安置した」と伝えているが、室町時代に造られたものである。六十年に一度の開帳という秘仏であるため普段は厨子の中に収められている。そうしたことから金箔がよく残り保存状態もよいという。現在、宇都宮市の文化財に指定されている。ともあれ辺鄙な地に立派な聖観音菩薩像があること自体珍しい。

この聖観音菩薩像は、通称茂原の観音様として参拝者より親しまれ信仰されている。ご利益は、安産・子育て、馬の健康祈願である。縁日は一月十八日である。一般に観音様の縁日は、毎月十八日であり、特に年の初めの縁日を「初観音」と称し、盛大に行事している所が多い。茂原の観音様は、この例に倣ったものである。江戸後期から昭和初期、茂原の観音様の縁日は大層賑わった。茂原地内はもとより河内

郡一帯より参拝に来る者があり、また、参道階段下の広場には露店が並び終日賑わったという。中には赤子を背負ったり、愛馬を引き連れて来る者もあったという。堂内には数十枚の絵馬が残されているが、茂原の観音様に対する人々の篤い信仰を今に伝える。

中でも特筆すべきは、「間引き図」絵馬である。大きさは縦七〇センチ・横八五センチ、絵柄は鬼の形相をした産婦が産まれたばかりの赤子を押し殺し、それを観音様が戒めている様子を描いたもので、天保十四(一八四三)年十月に寺内四郎右衛門が奉納したものである。天保十四年、この頃は、頻繁に飢饉に襲われ、

農村が大変貧しくなった。そのために生まれたばかりの子どもを闇に葬ってしまう、間引きの風習が横行した時期でもある。その結果人口減少を引き起し、経済発展にも悪影響を及

ぼしたので、幕府や各藩では間引きを厳しく取り締まり、特に宇都宮藩は、間引き禁止の教育に熱心であった。奉納者の寺内四郎右衛門は、茂原村の名主である。彼は村を治める身ゆえ、安産・子育て祈願にやってくる人々に対し、観音堂は間引きを戒める恰好な場所なので絵馬を奉納したのである。間引き図絵馬は、もともと観音堂の軒先の人目につく所に掲げてあった。彼は縁日にやってくる参拝者に、自ら絵馬の図柄を説明しながら間引きを戒めたものと思われる。

平成三十一年二月十八日、この日は、開運寺の僧侶による護摩焚きから始まった。さすがに最盛時ほどの賑わいは薄れたが、それでも三々五々参拝者の姿が絶えない。観音堂脇の事務所には、安産・子育てのお札を買い求めるものもある。観音様は、今なお茂原の人たちの心のよりどころとなっている。



観音堂と参拝者